

ウォーミングアップはお早めに。  
第二の人生に備えて…。



**豊かなセカンドライフのためには、ひとり一人の準備が必要です。それは、若い間にしかできないこと。老後のこと、考えてみませんか。**

最大限に力を発揮するために重要なこと、それは入念な準備。スポーツに限った話ではなく、勉強や仕事などいろんなことにあてはまります。もちろん、人生についても同じ。ゆとりあるセカンドライフのために、ひとり一人の備えがますます必要な時代になってきました。確かな老後対策のひとつとして、真剣に考えてみてはいかがでしょうか。JAなら、様々なタイプの個人年金プランをご用意しております。

終身年金タイプ	生涯にわたって年金が受け取れます。年金開始日から15年間は、万一お亡くなりになっても、残りの期間の年金が受け取れます。
定期年金タイプ	5年・10年・15年など、老後の一定期間に受け取れます。公的年金開始までのつなぎとして、ご利用をおすすめします。
掛金建てタイプ	1万円、2万円など、月々の掛金金額から年金金額を決められます。

## JAの年金共済

どなたでもご加入になれます(ただし、一定の制限があります)。くわしくは、お近くのJA(農協)へ。 ■ホームページアドレス <http://www.ja-kyosai.or.jp>

JA共済  
**しあわせ夢くらぶ**  
HAPPY & DREAM CLUB

くらしの保障をまとめると、おトクとお楽しみがついてくる♪ プラス割引で「ひと・いえ・くるま」の掛金割引、さらにおトクな特典いっぱい。「JA共済しあわせ夢くらぶ」新登場! 手続きは簡単。入会費・年会費は無料です。くわしくは、お近くのJA(農協)へ。





アメリカFDAが承認した!?最新漢方がん治療薬

# CHML(細胞向性非均質分子脂質)は がんの救世主になれるのか?

レポート&写真 / はみだしドクター 牧瀬恒平

ドクター・シユーからEメールが届いたのが今年の9月26日でした。「ここ1週間ほど広州にいたので、CHMLを使っている病院を貴殿に紹介するから中国に見に来ないか」というメールです。あまりに突然の話で、ぼくは日程をどう調整すればいいか戸惑いました。しかし、「わかった。必ず数日中にそちらに行くから」という返事を、その場で送り返しました。がん治療薬の真偽を確かめる千載一遇のチャンスです。

## 漢方の要素が入っているのに アメリカ製とはいかに?

CHMLとは(Cytotropic Heterogeneous Molecular Lipids)の略です。日本語に訳せば、細胞向性(あるいは細胞親和性)非均質分子脂質ともなるでしょうか。がんの特効薬です。こうあつさり書くとは、読者諸氏から「何?冗談でしょう」という嘲笑が聞こえそです。おまけに中国ともなると、あの死人まで出したやせ薬の件もあり、「いかがわしい!」と、おしかりを受けるかもしれません。でも、どうやら本当らしいのです。いや、かぎりなく本当に近いらしいと言ったほ

うが正確でしょうか。

そのCHMLの開発者、中国人の医師、許正(シユー・ゼン)と発音するらしいのですが、ここからはドクター・シユーと書きます)との出会いは、中国でも日本でもなく、実はメキシコなのです。ぼくは今年の7月、8月とメキシコの、アメリカとの国境ぞいの町ティファアナにあるオアシス病院というところに、そこで行われているオゾン療法の研究のために滞在していました。そういうがんの代替療法をやっている病院にドクター・シユーがやってきたのです。4、5年前から、その病院と関係があるらしく、CHMLをオゾン療法と併用すればどういう結果になるかということで、付き合いがあったらしいのです。彼はCHMLの説明のためにいつもそのCDROMを持ち歩いていて、ラップトップのコンピュータを使いながらぼくに熱っぽく語ったのです。まったく、文字どおり熱っぽい語り方で、まるで京劇の役者のように大きな身振り手振りをまじえながら、中国語的英語でまくし立てるのです。言いたい事が、英語でうまく表現できないらしく、ときどき勢いあまって、つばきまで飛んで



きます。自分が開発した薬に絶対の自信がある研究者の語り口です。これはひょっとすると本物ではないかという予感がするのです。嘘やいい加減なものではあり得ません。Memorial Sloan-Kettering Cancer Center、およびNational Cancer InstituteでフェーズIとフェーズIIの治療をクリアしています。彼は上海出身で、その大学の医学部を卒業しています。今年51歳、医学研究者としては最もあぶらの乗りきっている年齢です。10年ほど前にアメリカにやってきて、いまはワシントンに住んでいます。今年12月にはアメリカ国籍が得られるはずだということです。彼が主張するには、CHMLは中国の製品ではなく、アメリカの製品だということです。彼がそのアイデアを中国で得たのは確かなのですが、開発、完成はアメリカで行われ、いま、自分が勤めているアメリカの会社がその特許を得ていると言っています。中国製品に対する信用のなさを熟知しているようで、CHMLを中国製だとは言ってくれないな、アメリカ製と言っ

れといつことなのです。  
**それではCHMLとは何なのか**  
 ここで簡単にCHMLについて説明しておきます。  
 成分は80%が不飽和脂肪酸、15%が飽和脂肪酸、4%が脂溶性ビタミン、1%がスクワレンで、完全に自然の物質からつくられています。もっとも、不飽和脂肪酸といってもどんな脂肪酸なのかといったことや、原材料など詳しい内容は、**企業秘密らしく明らかにされていません**。アンブルに入った液体です。  
 これを例えば肝臓がんのケースでは、肝動脈から毎日2アンブル、25日を1サイクルとして投与します。脳腫瘍、とくにグリオーマ(脳腫瘍の40%ほどで、悪性のもとの良性的のものがある

◎ 牧瀬恒平プロフィール

京都今出川牧瀬診療所院長。早稲田大学政経学部政治学科中退。熊本大学医学部卒業。フルシャワ・メディカル・アカデミー研究留学(脳生理学)。71か国を渡り歩き、世界中の代替医療を研究。著書に「牧瀬忠廣の名前で『医者に殺されないための実践ビタミンサバイバル』(ビジネス社刊)などがある。連絡先はwww.drmake.com。





ります)の場合では、週に2回、1回に2アンブルを3週、局部注射により投与します。乳がんでは12〜24アンブルを週に2回、1回に2アンブルを3週、局部注射により投与します。胃がんには動脈注射により毎日2アンブル、25日を1サイクルとして投与します。肺がんには25日間に、100アンブルを静脈注射によって投与します。転移がない場合、7割のケースで、せいぜい2〜3サイクルでがんは消滅してしまいます。まさに、目前でがんが見る見る消えていくのです。しかも、まったく副作用がないのです。まさに驚異的です。

## CHMLの作用には どんなものがあるのか

その基本的な作用機序は

- (1) 血管新生阻害
- (2) アポトーシスの誘導
- (3) 免疫の向上

がんも他の細胞と同じく、増殖していくためには栄養が必要です。栄養ががん細胞に届かなければ、がん細胞は大きくなれません。がんが厄介なのは無秩序に大きくなり他の器官を圧迫したり、あるいは食物の通過を邪魔したりするからです。たとえ胃の中にがんができて、それが直径1センチほどのかたまりでおさまっていてくれれば、転移しないかぎり、末長く共存できます。食物の通過にほとんど影響がないからです。しかし、大きくなり、通過を妨げるから問題なのです。

がんは栄養を得るために、近くを走

っている血管に向かって特別の物質を出して、その血管から分岐をつくりださせ、自分のほうに新しい血管を造成させます。これを血管新生と呼びます。CHMLはそのようにしてできた、腫瘍と普通の血管を結ぶ分岐の血管のみを特異的に破壊していきます。正常な血管は、そういうがんに向かう分岐血管とは構造が違わしく、CHMLにより破壊されないのです。したがって、がんは栄養を補給されることがなく、死んでいきます。サメの軟骨の血管新生阻害作用も有名ですが、CHMLのほうが強力な印象を受けます。彼が見せてくれたひとつの血管造影写真(食道がん)では、CHML投与後わずか3時間でガンを取り巻いている血管が消失しているのです。

二番目のアポトーシスとは、細胞の自殺を意味します。例えば、ヒトの手には胎生初期には鳥のように水掻がついていますが、その細胞の自殺により、指が5本離れて生まれ出てくるわけです。また普通、新しい細胞と入れ替わるときは、古い細胞は自ら穏やかに死んでもらわねば困ります。つまり、アポトーシスは生物の生命維持には必須のものなのです。アポトーシスに対して、ネクロトーシスという言葉があります。これは壊死と訳されます。細胞が熱や化学物質で無理やり壊れることを意味します。アポトーシスはそうではなく、自然に、自ら細胞が溶解していくわけです。がん細胞がそのように死んでくれれば、非常に助かります。CHMLはこのアポトーシスをコントロールするいくつかの遺伝子に作用し

て、がん細胞の自然な自殺を招きます。

## 30%も免疫が向上するのは 本当だろうか

最後の免疫の強化作用ですが、CHMLによって20〜30%ほど免疫の力が増すといわれます。しかしこの表現はじつに曖昧で、ぼくは好きではありません。免疫に関する細胞は現在ではおそらく100以上見つかったいるはずですが、それらの細胞のうち、どれがどのようにして増え、どのようにして免疫を強化するのか、不明瞭です。この点をドクター・シユーにもう少し詳しく説明してもらう必要がありますが、次の機会にまわします(その他、細胞の分子管官と呼ばれるP53という遺伝子の発現を促す作用もあるようです)。

以上の三つ、(1) 血管新生阻害、

(2) アポトーシスの誘導、(3) 免疫の向上、を同時に行える物質は初めて見ました。しかも、がん細胞そのものをターゲットにして、じかに送り込むわけですから、その効果は確かでしょう。経口的に摂取するサプリメントよりも当然、治療成績はいいはずですが、もともと、その反面、患者さんが手軽に家庭で行えるというものではありません。最低、血管造影ができるほどの施設がある病院に入院して治療されなければいけません。しかし、生きるか死ぬかの病気ですから、それは当然のことですが。

ぼくは、このCHMLを日本にどのように導入するか、あるいは紹介するかを考えていた最中でした。しかしそれには、まず自分の目でCHMLの効果を確認なくてはいけません。アメ

## はみだしドクターマキセの独り言

現代医学の苛酷さと不毛さにいやげがさして、ここ7〜8年ひたすら代替療法の探索に力を注ぎました。その結果、たいいていの病気は副作用の多い現代の医薬品を使わず、ビタミン、ミネラル、その他のサプリメントではるかにいい治療ができることを確信したのですが、がんだけはむずかしいという印象をぬぐえませんでした。もちろん、厚生労働省のお墨付きの抗がん剤よりも、キノコ、フコイダン、環状重合乳酸(CPL)、ゲルマニウム、サメ軟骨、サメ肝油、プロポリス、エピガロカテキン、セレンなどといったサプリメントで対処したほうが、はるかに延命できるのですが、いったんできてしまったがんを治すことはなかなかむずかしいのです。抗がん剤を使っていたときより「痛みがずっと軽減した」「食欲も増した」「動けるようになった」という、いわゆるクオリティー・オブ・ライフの改善を経験される患者さんはずいぶんいらっしゃいますが、結局は亡くられます。がんが目の前で、みるみる消えていくというような魔法のサプリメントにはまだ遭遇できていません。

世間には、「奇跡の〜キノコ!」、「〜でがん消失!」、「〜でがんからの生還!」といったセンセーショナルな題名の本が氾濫しています。たいいてい、著者は明記されておらず、どこそこ大学医学博士監修、あるいはなになに研究所所長監修となっていますが、中には実に怪しげな経歴の博士や研究者もおられます。そして、必ず本の最後のページに、そういった奇跡のサプリメントの入手先が載っており、いかにも売らんかなという商魂のみが目立ち、本来素晴らしいはずのサプリメントがかえって貶められています。しかし、このCHMLは、まがいものではなさそうなのです。やっと本物に出会えたという感触があるのです。

## ○オゾン療法とは

鎖骨下静脈から静脈血を体外に取り出し、人工透析器に似た装置に通しながらオゾンに吹き込み、また体内に戻すという治療法です。かなり、がんの効果があります。おおまかにいえば、30パーセントの患者さんのがんをわずか3週間の入院治療で10〜30パー

セント縮小させます。そして他の30パーセントの患者さんのがんは縮小はしないものの増殖は止まります。しかし、残りの40パーセントの患者さんのがんには効果がありません。要するに60パーセントのがんには効くということ、これはこれなりに、実に素晴らしい治療法です。もちろん、副作用は何ひとつありません(牧瀬)。



リカに見に行くのはたいへんです。時間もお金もかかります。そんなおり中国から、ドクター・シューのEメールが届いたのです。彼はCHMLの治験を中国の病院にも依頼していたらしく、その結果を検討しに中国に帰っていたのです。

## 75%に有効。素晴らしいすぎて肩に唾をつけて「ほんまかいな？」

ぼくはさっそくインターネットで広州行きのフライトを検索しました。大阪からだと中国南方航空が毎日飛んでいます。JASを使用したかったのですが、羽田からしか就航していません。ぼくは関西に住んでいますから、中国南方航空で行くことにしました。

幸い旅行シーズンは終わっていませんから翌週のすべてのフライトに空席がありました。往復の格安チケットで、関西国際空港の使用税も入れて21日間のオープンで5万2700円です。東京・福岡往復よりも安いのです。14時50分発で広州には18時に着きます。4時間弱の飛行時間ですが、広州のぼくが1時間遅れの時差のためこうなるのです。

ホテルに着き自分の部屋に荷物を置くとすぐにドクター・シューの部屋に行きました。彼とはメキシコ以来約2か月ぶりです。「How are you?」「I'm fine. Thank you and you?」と、初級英会話のテキストブックの決まり文句のようなあいさつをすると、中国人の脳外科医を紹介されました。その脳外科医はぼくに会うために来たのではなく、ドクター・シューから

CHMLの説明を聞くために来ていたようです。そこにぼくが聞入したので、タイミングがちょうどよかったわけで、2人でドクター・シューの話を聞きました。

脳腫瘍に対しても目を見張るものがあります。ガンマー・ナイフよりすごいです。CHMLは腫瘍が局限しているなら、脳腫瘍のタイプにかかわらず、非常に効果があるのです。ドクター・シューの言葉を借りて言えば、ほぼ100%腫瘍は消えるということです。その理由は、CHMLはとくに血管新生阻害作用が強いからです。がん細胞に栄養を供給している通路を破壊するのですから、当然といえば当然です。したがって、転移が激しく、がんがあちらこちらに散在しているような場合は、効果は薄くなります。基本的なイメージとしては、がん細胞に向かって狙い射ちをするような仕方です。CHMLは投与されなければいけないということですが、

それでは、初めから狙い射ちなどできない、がん細胞が血液にのって全身を循環している白血病にはどうかというところ、彼の資料によると75%に有効なのです。しかも、まったく副作用なしです。実に素晴らしい治療です。あまり素晴らしいので肩に唾をつけて、「ほんまかいな？」と、思わず疑いたくなりませんが。

## 中国の最高の病院で 治療された結果

翌日、佛山市第一人民医院の院長ドクター・タン(譚)が、病院の自動車



佛山市第一人民医院の診察室(上)と病室(下)。明るく清潔そうでした。

とか国立大学医学部付属病院や、どこそこ曰く赤病院よりはるかに近代的で衛生的です。その大病院の院長であるドクター・タンは、弱冠49歳の俊英の外科医です。若いころの毛沢東にちよつと似た、なかなかハンサムな男です。10月1日より国慶節が始まり、この1週間は休みだというのにドクター・タンはわざわざ休暇を返上して、ぼくが来るのを待っていてくれたのです。まことにありがたいことです。

## 患者2名と面談すると 元気づいた姿が

広い院長室に入ると5分もしないうちに2人の患者さんが入ってきました。2人はCHMLによりがんが完治した人たちです。CTスキャンの写真もそろえてありました。その例をここに簡単に紹介します。

- ▼患者さんM。女性。1952年2月生まれ。職業。オフィスワーカーで事務。▼1998年5月・右乳房の乳管がんの診断。化学療法を開始する。▼6月・タモキシフェンも使用し始める。▼12月・白血球減少のため化学療法10サイクルで終わる。▼2001年5月・肝臓と腹膜に広範な転移が発見される。▼5月25日よりCHML療法を1サイクル；25

なことがある場合、実に便利なことなのです。とくにアメリカに、高度な手術を受けに行く患者さんがいますが、行くだけで体力を消耗し、かえって体に悪いのではないかと心配されることがあります。健康な人間でもかなり疲れますから。しかし、4時間であれば、これは何とかしのげます。ビジネスクラスに乗せてあげればもっと楽です(特選)。

## ○中国は意外と便利

時差がたったの1時間、飛行時間が4時間という海外旅行は実に楽です。とくにアメリカへの旅行は時差が14時間~16時間、しかも10時間以上のフライトですから、すっかり体の調子が狂ってしまいます。このことは、もし日本人の患者さんが中国の病院でCHMLの治療を受けるよう